
とあるGANTZからの転送者

音夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるGANTZからの転送者

【Zコード】

Z8516Z

【作者名】

音夢

【あらすじ】

注意、この作品は『GANTZに選ばれた男の娘』のバロディーとして書いています。

神田 茜かんだ あかねはある事件をきっかけに死亡して、GANTZに選ばれた。

そんなGANTZで約1年間戦い続ける星人により殺された。そして目覚めたら『とある』の世界に転送されて、茜の世界ががらりと変わっていく。

プロローグ（前書き）

音夢の第2作品となりました。
いつぱい見て下さい。

あと、文章が固過ぎるかもしけなこですので、『上へ下へ』。

プロローグ

「つーーー！」

そんな声を出しながら、僕は強靭な剣戟により、体を剃る様に吹き飛ばされる。

「ぐはっ」

吹き飛ばされた先に有つた車にぶつかり、車のボンネットはへこみ、フロントガラスは僕に突き刺さる様に割れる。すると僕の体には痛みと言うなの衝動が駆け抜ける。

僕は車に乗る様になつている体を直ぐに起こすと、持つていたガンツソードを構える。

そして大きく息を吸い、荒れた呼吸を直しながら口を開じる。

頭の中には憎しみや怒りと言つた物が、僕を支配するかの様に込み上げる。それは妙に心地良く、僕のリミッターを外していく。

すると体は軽くなり、その支配に身を任せ、溺れながらを開き、こう呟いた。

「破壊する」

僕の心は『破壊』と言つ言葉に包まれていき、自分を壊していく。

するとそいつのオーラが僕を食らい、潰すかの様にに強大になる。

だが僕はオーラに飲み込まれながらも構えた刀をそいつ口掛けて、突く！

足はしつかりと踏み締められ、腕にはそいつを捉えた感覚と確かな手応えがあった。

だが次の瞬間、僕の心臓はそいつにより突き抜かれた。
体には痛みと言ひ、概念を通り越して、『無』つまり麻痺が僕の体を覆う。

そして

「えつ」

僕の中には疑問だけが浮上する。

なんで？なんで！ちゃんとやつたのに
すると段々と意識が消えていく。

体は倒れていき、胸からは血潮が吹き出され、且には僕を突き刺した刀を持っている爺いが立っている。

「青いの一」

爺いはそんな事を僕に言い放ち、その言葉が僕の頭に響き渡り、僕は完全に地面に倒れ込む。

そして体は動かなくなり、爺いが気持ち悪い笑みを浮かべながら消えていく。

爺いは完全に僕の前から消える。

すると僕の頭に走馬灯が走り抜ける。

嫌だ！

僕は死にたくない

まだ、たくさんやりたい事だつてあつたし

それにはこんな死にかたは嫌だよ

僕は走馬灯に縋りながらも、ゆっくりと目が閉じていく。完全に目を閉じると僕の瞳から涙が零れた。

涙は僕の頬を通りながら、僕は完全に死亡した。

死亡した体は重く、そして痛みが走っている。目を開け様としても開かず、暗闇だけが僕の目に入り込んでいる。

暗闇の中で僕はただ一人で孤独を味わっていた。そんな僕にはもう考える気力すらなく、ただひたすらに暗闇の中にいた。

「もう死にたい」

そんな僕の本音が響き渡り、僕を押し潰して来る。涙は枯れ果て、悲しいすら無意味だった。

もう嫌だ！

僕は暗闇の中で何かを殴る様に腕を横に降る。腕には何かが当るはずもなく、僕は空振りをした様に暗闇の中に倒れ込む。

そんな体を起き上がりさせる様に足に力を入れる。大切な人を守れもしない

ゆっくりと立ち上がり、僕は本音を暗闇に解き放ち。なに一つ守れないなら、僕はこんな自分を恨む。喉には力が入り、声を振り絞り。

僕はこんな、こんな自分を、殺す！！

叫ぶ

声は暗闇に響き渡り、僕の体を溶かす様な光が僕に降り注ぐ。

すると枯れ果てたはずの涙が、目から零れ落ちた。

そして僕は光を求める様に手を伸ばす。

伸ばした手は燃える様な痛みが走りながら、光に飲み込まれる。様に転送され、消えていく。

体は全て消え去り、もう力すら入らなかつた。

顔だけが残り

そして最後の力を振り絞つて

「誰か助けてよ」

そう叫び、僕はなにかを握つた。

その時には僕はもう光に飲み込まれて消えた。

僕は助けを求めて、消えていった体に力を入れる。すると体には力が入り、僕はゆっくりと目を開く。

目には眩しい程の光が入り込み、僕は反射的に目を瞑る。

そして目が慣れた所でもう一度目を開く。

そして入つて来た光景は教会だった。

しかも教会の中で一番偉い人が祈りを捧げる、魔方陣が書かれた所に僕はいた。

手には本を握り、茶色のショートヘアだった髪はロングヘアに
なっている。

そして着ていたはずの服は着ておらず、代わりに黒い修道服を着て
いた。

僕は理解が出来ず「何処?」そんな言葉しか出なかつた。

プロローグ（後書き）

感想をこつぱこトセー。

主人公設定

主人公設定

神田 茜
かんだ あかね

身長142cm 体重40kg

性別、ギリギリ男。まあ男何だけどね。

特技・好き

格闘技『GANTZのミッション中に鍛えられた我流の『料理』一人暮らしによつて毎日の様に食事を作つていた。その為か料理本をよく見ていて、小技だけならプロLevel』

大切な人『友達や自分を見てくれる人』

嫌い・苦手

友達を作る『沢山いたがGANTZによつて奪われいき、失う事を極端に恐れている』

人ごみ『人が周りにいると集中出来なかつたり、よく男女とわざにナンパをされるから』

容姿

GANTZで表すなら、玄野計が2で岸本恵が8。
『とある』なら御坂美琴が7で一方通行3でわつた感じ。
美男子と言つ寄りは、可愛い、美しいが似合つ美少女。

目はキレる、もしくは敵を殺る時には鋭く、そして狩人の目の様に

冷血になるが、普通時は優しい感じの目。

髪は転送前は「バティアムショート」なのだが、転送された事によって長く美しい茶色のロングヘアーになった。

声は女でも通用する高さの声と言つよりは、女では低くて男でも分かるかな?と言つた感じの声。

性格は自分の事よりも周りを重視する様な良い人なのだが、自分ではただの偽善者、大切なを助けられなかつた償いと言つた思いが心の中にある。

僕は理解出来なくなっていた
手には見知らぬ本を握り、しかもショートだった茶色の髪がロング
になつている。

しかも刀で突き刺された心臓はな治り、血の付いた服は黒く、そし
て妙に重い修道服に変わつてゐる始末だ。

そして口から出た言葉は「何処?」だつた。

目に入つて來る光景は木の椅子が並び、僕の後ろには大きなステン
ドグラスがある。

ステンドグラスから光は反射されていない。

それには綺麗と言つた言葉はなく、そんなステンドグラスはただの
ガラスだ。

そして多分、教会だらうがやはり『何故』となつてしまつ。

僕は記憶を思い出していく。

GANTZのミッション中に死んだはずなのに。

僕はゆつくりとだが、記憶された光景、声、人物を思い出していつ
た。

すると頭の中に自分自身を殺したいた記憶、そして、そんな
自分を助けて欲しいと思つた二つの記憶が流れ来る。

「大切な人は守れずに、何で僕は生きてるだよ」

そんな言葉を自分自身に、そして大切な、人達を思い浮かべな
がら僕は咳く。

すると体の中に怒りと憎しみ、愛おしさが溢れ出す。

怒りは僕の心を支配し、憎しみは体を支配する、そして愛おしさは僕の衝動を呼び起こしていく。

「ぐつうう、はー、ハアハア」

僕は右手を額に当て、肩で息をしながら、何とか怒りと憎しみを抑える。

「ハアハア僕には死ぬ覚悟すらない、の、か

僕は自分自身を憎み、死にたいと思ったが死ぬ覚悟すら存在しない。

「なら」

体を起き上がらせ、唇を噛み締めながら。

「弱い僕には生きるしかない。あの人の為にも、弱さを捨てる」

僕はそう呟いた。

例えどんな事が会つても、死なないと。

生きるだけしか出来ないなら。

僕は一旦、氣を落ちさせて状況を把握する為に、持っていた本をもう一度見る。

本の表紙には何も書いてなく、

1000ページと超えているだろうかと言つぐらい厚い。

そしてそのページ数に見合つた重さが手に掛かる。

「見てみるか」

僕はそのページ数に悠つを抱きながらも本を開く。

そこにはインクで書かれた様な文字があり。

『自分を憎み、自分を殺したいと思つた黒い玉の使者よ、力を欲し
る』

こう書かれていた。

僕がその文字を見た瞬間に何かが変わる。

「つ

痛みが僕の頭に走り抜け、体の血に何かが生まれた。

血管から血は身体中を巡り、僕は本を離す。

だが離した本は空中を浮き、頭に直接的にページが入り込んでくる。

その莫大なページのデータは、頭に覚えていく事は出来ずに、ただ理解と言つ一点だけがされた。

すると細胞が理解された答え、そして身体中を駆け巡る血に反応する様に何かがおこる。

それは僕の背中に焼ける様な痛みが駆け抜ける。

それと同時に、明らかに僕の存在が変わった。

それは強さとも言え、定義とも言えるだろうか。

「何これ、ハアハア」

僕は肩で息をしながら、理解された答えを頭に思い浮かべた。その途端、頭に痛みが駆け抜ける。

痛みにより、頭は何も考えられなくなる。

すると本は青い炎を生みながら燃え上がり消えていく。

「なんだつたの？」

僕は手を額に当てながら、そう呟いた。

すると目の前にある大きな扉がゆっくりと開く。
扉は木が伸縮し、そして扉を繋ぐ金具からは扉の体重をなんとか支える様な危なつかしい軋みが響く。

扉が完全に開き、扉を開けた二人の人が見えた。
僕は直ぐに修道服のローブを羽織り、顔を隠す。

一人は男で、赤髪のロン毛をしている。
身長は200を超えているだろうか
顔には縦線のバー「ードがあり、そして僕と同じ黒い修道服を着ている。

もう一人は女で、片方だけが太ももまで無くなっているジーンズに、
白いTシャツ、そして腰まで滑らかに伸びたポーテール。
そして腰には長い刀がある。

そいつらが僕に近づき歩いてくる。歩く度に音を立て、そして目が
会った瞬間に、場の空気が変わる。

空気は痛い程に僕に突き刺さる。

「君が『黒い玉』の使者かな？」
修道服の男が僕を挑発するかの様に言つて来る。
「知らないよ」

「嘘は辞めた方が良いですよ」
ポーテールの女が冷血に僕に言い放つ。
「嘘なんて言つてませんよ！」

「それは僕達が決める事だよ」「するで男はタバコに火を付け、吸い出す。

「なにしてるの？」

「これをするためさ」

男はタバコを僕に向かって落とす様に投げる。

「なつ！」

すると僕からしたら、あり得なくはない光景がおこる。

タバコに付いた火がまるで、その場に広がる様に燃え上がり、僕に近づいてくる。

これだけならば、全くと言つていい程に僕は見てきたが、それを人がやつていると言つ事が不思議だつた。

「」

すると僕はロープに当たり、ロープを燃やしながら消えていった。

「ロープ燃えちゃつた」

僕の顔は完全にあいつらに見られた。

「君、女だったのか」

「違つたよ

「まあ、どうでもいいけどね

男は手に炎を集めながら、そして僕は長い髪を靡かせる様に右足を後ろに引く。

「巨人に苦痛の贈り物ー」

「巨人に苦痛の贈り物ー」

放たれた

男は手に炎を集めながら
「巨人に苦痛の贈り物ー」
放された。

「やつぱり、あり得ないよね」
放された炎とは、約5mぐらいが離れているが熱く、大気中にある
水分を枯れ果てるぐらいまで気温を上げる。

すると炎から火花が散らされる
火花は周りにある椅子や床に着火しそうなりながら、段々と大きく
なり僕に近づいてくる。

僕は反射的に足に力を入れ、炎に接近する。炎に近づくと体には焼
ける様な熱が突き刺さる。

暑い

そして炎との距離が1mを切った時、僕は炎に飛び込み様に回避し、
男の視界から完全に消える。

「残念だつたね。まあ、これながら何回やっても「おそいでですよ」

「えつ！」

僕は修道服のズボンを膝ぐらいで落とし、一瞬で男の真横に来て
いた。

男は直ぐに僕から距離を取りながら、もう一度炎を手に集める。

すると背中に味わつた灼熱の痛みが、また現れる。

そして僕はこんな言葉を無意識に呴く。

「力を解き放て」

そう呴いた瞬間に僕を覆つ様に、螺旋を描きながら青い炎が現れた。

「ふふ認め様、君が黒い玉の使者だと言つ事を。だが一旦君には痛い目にあつてもらつ」

男がそう言つと、男の感じが変わる。

すると男から空氣?なのかな?、解らないが渦を巻く様に何かがある。

そして男はそんな事に見向きもせずに、呴き始める。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

男を囲む様に炎が生まれる。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり」

そして男を囲つた炎が、男の周りを回り始める。

「それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり」

炎は巨体に

「その名は炎、その役は剣」

炎は熱く、呻き

「顯現せよ、我が身を喰らひて力と為せ」

その瞬間、炎は男の後ろで牛になる。

「魔女狩りの王、イノケンティウス」

そのイノケンティウスと呼ばれた炎は僕を食らうように襲つて来る。

「スタイル、やり過ぎでは」

すると女が刀を握みながら、止めに入つて来る。

「関係ないさ」

だが男は止めずに、僕にイノケンティウスを向けて来る。

「暑い」

僕は螺旋を描いている炎をコントロールしながら、炎の純度を上げ、炎を槍の様に鋭くする。

そしてイノケンティウスの肩田掛けて、炎を飛ばし、貫く
イノケンティウスの肩は消滅するが、直ぐに復活する。
「そんな事しても無駄だよ。炎と炎がぶつかり合うだけさ」
男は僕を襲む様に言って来る。

「へー、なら」

僕は感覚を研ぎ澄ませながら炎を操り、炎を消す。

「なんのつもりだい」

「関係ないでしょ」

すると男は軽くイラついたのか

「そうだね」と言い、そのままイノケンティウスを僕に襲い掛か
せる。

「熱がダメなら」

僕は手をイノケンティウスに向ける。

すると手には鉄をも溶かす熱が伝わってくる。

「アブソリュートゼロの炎を」

僕は手に渦を巻く様に、炎を集る。そして炎を刀の様にして、手で握る。

すると手から身体中に、炎の温度が駆け抜ける。

それは冷たさと言ひなの、炎の熱だろうか。

そして足に力を入れ、イノケンティウスに飛び込む様に接近する。

1m付近まで接近すると、僕は炎の刃をイノケンティウスの首目掛け、斬りつける。

手には物体を斬った感覚はなく、空振りした感じだ。

「なに！」

男はあり得ないと言ひよりは、あるはずが無かつた光景を見たかの様な声を出す。

それは多分、コレのせいだろ？

イノケンティウスは首から、身体中を蝕む様に凍結していく。

結構、使えたな

僕はある程度の感覚を覚えながら、また炎の純度を上げていく

すると炎は大気中との温度差により、音を立てる。

「くつそ、なら」

男はもう一度、炎を集め様とすると、女が黒いボーネーテールを揺らしながら僕に近づいて来る。

「流石にやめた方がいいですよ」

女は軽く怒っているのか、冷血過ぎる声で男に言い放つ。

「しょうがない」

男はそれを察したのか、炎を消しむる。

「すいません、私の仲間入りが迷惑を掛けました」

女が急に謝罪をしてきた。

「えつ？ なに！」

僕は状況を理解出来なくなつた。さつきまでは男を殺る、で理解出来ていたが、今の女の謝罪で理解不明になつた。

「だから、悪かつたと言つてるんだ」

男までもが僕に謝罪してきた。

「えつと」

すると僕はいつきに緊張感から解き放たれた。それと連鎖するかの様に、炎が僕の手から消えていく。

炎が全部消えると、足に身体中の体重が掛かり、意識が遠のきながら倒れていく。

そして僕は倒れながら女の胸に倒れ込んだ。

「キヤツ」

女は可愛らしい悲鳴を上げる。

が、少なくとも僕を退かさないつて事は、嫌がつてはいない様だ

「すみません」

「いいですよ。ゆっくりと寝て下さい」

女は僕を包み込む様な笑顔で、僕の頭を撫でてくれた。

そして僕は女の言葉に身を任せて、眠りに着く。

僕の目の前には僕と言つなの化け物がいる。

それは翼を生やし、腰に掛けて長い髪と、手に持つていてるブレード、そして着ていてる修道服には大量の血が着いている。

そんなやつと僕は、この白い空間にいた。周囲には何も無く、ただ白く、壁の無い空気が続いていた。

すると、そいつが僕に喋り掛けてくる。

「てめえは何がしたいんだ」

「何つて？」

僕はそいつの疑問を抱き聞き返す。

「ふつ、簡単さあ。てめえはGANTZに出会つて大切な人が出来た。だが、大切な人を失つた、てめえは最早それを忘れて、新たな力を手にして自分を欲しいと、自分が愛しいと言つた。そんな、てめえは何なんだよ」

そいつの言葉は痛みを思わず程に、深く、鋭く僕に突き刺さり、僕の心を抉り、切り裂く。

「違う！僕は忘れてなんか」

僕は叫び、そいつを睨みながら叫んだ。

だがそいつは

「違わないさ」

その言葉で片付けた。

「五月蠅い！！僕は、僕は

僕は叫びながら、強く拳を握り締める。手には爪が突き刺さり血が
出る。だが痛みを感じる暇さえなく怒りが込み上げる。

「責められただけでキレるなよ

また僕を、僕を

感情は収集がつかなくなり、怒りは限界地点を、超えた。そして思
わず声が出た。

「何が分かるんだよ

「はっ？」

そいつは意味不明なのか飽きた様に言つた。

「何が分かるんだよ！？」

僕は感情、理性のままに叫び。喉には痛い程の力が掛かり、叫んだ。

「まさにヒステリックだな。そんなクズに代わって僕がてめえを殺
してやるよ

するとそいつは、持つているブレードを高く上げる。ブレードから
は血が、そいつの手に向かって、ブレードの刃を津たりながら移動
していく。そしてブレードを振り下ろした。ブレードからは血が飛
び散り、白い床を血で染め上げた。

「じゃあな、クズ」

そいつはブレードを腕の一部の様に扱い、僕に接近してくる。僕は
足首と太ももを伸ばす様に、力を入れ、大きな回避行動を取ろうと
した時には、ブレードは僕の左胸を突き刺している。

「えつ」

左胸からは血潮が吹き出て、身体中を麻痺させていく。そして麻痺

すら感じさせない程の痛みが走る。

「な、ん、で」

そいつはブレードを僕の左胸から抜き、僕を見下す様に「また会うのかな。クズ君」と言い放つた。

するとそいつは腰から、体全体を抉る様に僕の前から消えていく。僕はそいつが消えるのを見ながら、ゆっくりと後ろに倒れていく。

そして、そいつが完全に消え去り、僕は白い床に倒れしていく。だが床に着く事はなく、遠泳に倒れ、落ち続ける。

手を頭の上に翳しながら、僕は痛みを感じ、多量の出血をしながら「ぐああああああああ」と叫んだ。喉には痛い程の力が掛かり、そして声は枯れ果てる。

すると僕を救う様に光が差し伸べられる。僕はその光に縋る様に、翳した手で掴もうとするが、光は掴めずに落ちていく。

その途端に、僕の目が覚めた。僕は左胸を抑える様にして、体を起こす。すると体の節々が軋み、痛みを発する。僕は慣れた様にその痛みを無視して、周りを見る。

そこは何処かの医務室だろうか。そして僕の膝には白いシーツが羽尾られている。そしてシーツの上には、黒く、そして僕を魅力する様に長く美しくボーテールをしている女がいる。

えっと、さつきいた女の人がよ
僕は軽く悩みながら考え始める。
なんで、いや、とりあえず起こさないと

そして手を女の体に乗せて、ゆっくつと揺すり始める。「あのー、起きて下さー。あのー」何回かやってみるが、全く起きれず、寧ろ悪化したかな?。

女は僕に近づきながら、首に手を回す様に掛け、ぶら下がる。すると首には体重が掛かるが、女性だからか、そんなに重く無く寧ろ軽いくらいだ。

「あのー、起きて下さー」

わざとよつも強く僕は女の体を揺すりす。すると「んんう、んんー」と変な声を上げながら、ゆっくつと皿を開ひぐ。

「ふえっ」

女は僕を見て、可愛らじい声を上げる。そんな感じを見ていると、守つて欲しいけど、護りたい感じが出て来る。

「あの、そろそろ離してくれませんか?」

流石に女性がこんなに近くにいると、あのー、恥ずかしい。

「あつ? あつー、そのすみません」

女は漸く皿を完全と言づか、僕にぶら下がつてゐるに驚いたのか、頬を赤くして、僕から飛び跳ねる様に離れる。すると女の髪は中を美しく舞う様に広がり、そして女の元へと戻つていぐ。

女は僕から離れると床に立ち、顔を下に向けながら、モジモジと両手を重ねて、指と指を回していく。その光景は凄く可愛く、僕を癒していく。

「あの、その「眠かったんですね

「えつ」

僕は女がいい終わる前に、僕の言葉を言つた。そして女の驚く様な声は、僕の心にゆっくりと染み渡つて来る。

「だつて、コレ貴方がやつてくれたんでしょ」

僕は羽織つているシーツを取り、ベットの隅に置くと女に見せる様に、体を回す。

僕の体には着ていた修道服は無く、代わりに白と黒を足りつたミニスカート。上には胸元を露出したブラウスをきている。そして腕には2~3本の包帯が巻かれている。しかも包帯は少なくとも2回は取り替えられた様な感じだ。

「あつ、はい」

女は覚束無い感じに答えてくれた。やつぱりね

「こんな事やってたら、誰でも眠くなつちやうよ」そう僕は微笑みながら言つた。すると女は落ち着く様に胸を下ろす。

「もう起きたんだね」

その声が耳に入つてくる。その瞬間、僕は足を回す様に体を声がした方向に向け、そして軽く拳を握り、構える。

そして体を回すと声の主が視界に入る。声の主はあの赤髪の男だつた。

「ずいぶんと物騒だね」

1-4 (前書き)

今日の投稿は終わりです。

「ずいぶんと物騒だね」

僕の視界には赤髪の男が入っている。顔には縦線のバーコードがあり、修道服を着ている。

「貴方が言えた口ですか」

ゆっくりと口を開け、過去を思い出し、冷静に返した。

「ふつ、それもそつだね」

男は僕の事実過ぎる、事実を認めた。まあ、それが正しいよね。

すると男はベットに座る。ベットには体重が掛かつたのか、軋み様に音を立てる。

「じゃっ」

そう言つと、男は修道服のポケットからタバコの箱を出した。そして箱からタバコを一本出すと、火を付け、口に運ぶ。

「なつ」

僕と女は同時にビックリしたかの様な声を出す。そして僕達の体は固まった。それはあり得ない光景を見たと言つたか、男の常識を疑つと言つた。

そうして20秒くらいが経ち、「ふつはー」男は口を開け、タバコの煙を出す。煙は中に浮かびながら、溶け込む様に消えていく。

「い」医務室ですよね

僕は固まった体を動かして、疑問を持ちながら言つた。すると男は

当たり前の様に「そうだね」と言った。

「僕は貴方の常識力を疑います」

「つてダメです」

女は腰に有つた刀を抜き、タバコの先端を切り落とした。タバコの先端は落下しながら、空気中の酸素を含み、燃え上がる。そしてタバコは空中でチリとなつた。

「なにするだ、神製」

男は女の事を『神製』と呼びながら、もう一度タバコの箱に手を掛ける。

すると僕は反射的に炎を出して、タバコの箱」と燃やした。箱からは鼻を刺激する様な匂いを一瞬だけ発するが、その匂いは消える。そしてタバコの箱はその場から燃え消えた。

「君も何をするんだ！しかも箱」とつて

「医務室で吸う方が悪いんですよ」

僕の言葉に男は何も言えなくなつて、無理くりに話を転換させようとしてくる。

「そう言えば君の名前はなんだい」

「無理に変えたいのは分かりますけど、名を聞くなら自分から名乗るべきですよ」

すると女は腕を伸ばす様に、刀を男の首筋に向ける。刀からは周りの光を反射して光つていて。そうすると女は「そうですよ」そう言い放つた。言葉からは飽きた様に感じられる。

「神製、分かつたから刀を引いてくれ」
すると女は刀を男の首筋から、伸ばした腕を肘から折るように引き、
腰にしまう。

「では、どうぞ」

「ああ」

男は軽く頷きながら、喋り始める。「僕の名はスタイル マグヌス
だよ」

すると女も喋り始める。

「私の名前は神製 火織です。気軽に読んで下さい」と可愛いらしく自己紹介をしてくれた。

「僕は神田 茜です」

僕は簡単な自己紹介だが、この中には100%の笑顔を入れている。
その途端に一人の頬が赤くなる。

「えーと、それでだ。君の事を聞きたいんだが、いいかな」

スタイルさんが僕に聞いてくるが、僕の頭の中には先ず聞いておかないと、いけない事が有った。それは「スタイルさん、何で僕に襲つて来たのか答えて下さい」

すると二人が苦笑いを浮かべながら、重そうに口を開く。

「いやー、その、ね、あれは」

スタイルさんの田はゆつくりと動き、田が合わなくなる。

「スタイルがかってに神田さんを試すと言つて、やつたんです」神
製さんが一瞬でスタイルさんの逃げ道を潰した。するとスタイルさ
んは「あははは」と気まずそうに笑う。

「まあ、それは置いといて」「置いていい物じゃないって思うよ、スタイルさん。

「僕の事は呼び捨てで構わないよ。茜」

「わかりました。スタイル。なら神製さんも僕なんかに、思まらないでいいですよ」

「わかりました。宜しくお願ひします。茜」と神製さんが僕を魅力する様に、綺麗で、今にも壊れるそつなくらいに纖細な笑顔を浮かべながら頷く。

「ですが私が敬語でないのなら、茜も私の事をもっと楽に呼び下され」

うーん、何がいいかな？

軽く悩みながら、一つだけ疑問が浮かぶ。それは、まだ敬語だよね。
「じゃあ、火織お姉ちゃんはどうですか？」

僕はなんとなく、からかってみた。

すると神製さんの頬が真っ赤になりながら、動きがゆっくりになつていく。

「かかか、火織お姉ちゃんですか」

「嫌ですよね、やつぱり」

僕はある程度の予想が出来ていた為、予想通りな答えを返す。

すると神製さんは喉を飲んだのか、喉の上から少しだけ喉仏が見える。そして神製さんはゆっくりと口を開け、「うれしいです。やつと、やつと姉になります」と予想より右斜め上をいられた。

「ほんとにいいの？」

「はい」

そうして僕は火織お姉ちゃんの胸に飛び込んだ。理由はもう一度、守るべき人が出来て嬉しかったからだ。すると火織お姉ちゃんが力いっぱいに抱き締めてくれた。

その途端、僕の頭に何かが過る。それは僕に何かを訴える様に。「で、僕達への質問はもうないかい？」

「えっ？ あ！ はい」

スタイルの声に僕は驚きながら、そう返事をすると、スタイルが医務室の外に出て、台車を押していく。台車は少しだけ音を立て、僕の目の前に止まる。

黒く巨大な玉を乗せた台車が

「この黒い玉の事、知ってるかい？ 知ってるなら西、君との関係を教えてくれ」

1-4 (後書き)

感想を下せ。

1-5 (前書き)

感想をお願いします。

「この黒い玉の事、知つてるかい？知つてるなら茜、君との関係を教えてくれ」スタイルの声は僕に入らずに、通り抜けていく。

僕の目の前にあつたのはGANTZだ。それは似た何かと言つさえも出るだろうが、違わない。これは紛れもないGANTZだ。その場を威圧し、そして僕の体を震わす。

「知つてゐようだね」

「知らない」

ダメだ。この一人にはGANTZの事は教えられない。知つたら、GANTZに溺れてしまう。

「茜、私に教えてください」

火織お姉ちゃんはあからさまに嘘を言つてる僕を、怒るわけではなく、ただ優しく聞いてくる。

「ほんとに知らないよ」

GANTZの威圧に潰されそうになりながらも、笑顔を作りながら、その異様な物体に触れる。

「ひ

僕の頭に痛みが走る。それは、まるでGANTZと僕が繋がった様に痛みが放たれた。僕は額と頭を抑えて痛みを耐えた。

それと同時にGANTZのトランクが一斉に開いた。トランクの中

には、何も無かつた。
そんな、あり得ない

GANTZを動かす為に必要な男や、ミッション中に使つ武器すらも無かつた。それはつまり、GANTZではない？のか。でもこの感じはGANTZだよね。

僕の頭には多数の理論が浮かび上がるが、結論には達していない。

するとゆうへりと浮かび上がる様に、GANTZに言葉が表示される。

『 いこいつらをやっけやつてください。ちなみにルールはないだす』
そんな言葉が表示されるとトランクが閉まり、また新しい言葉が表示され様とするが、文字は消えていく。

「なんなんだい？」「はは」

スタイルが痺れを切らしたのか聞いて来るが僕は無視した。いや、声が僕の耳に入らなかつた。

「GANTZ、答えてくれ。ルールがないって、どういふ事なんだ」

するとGANTZに正しい文字を隠す様に、無数の文字が表示されていく。そしてある一定の場所に正しい文字が表示される。

「100てんを取つたからだす」

「は？」

僕の口からはそんな、間抜けな声が出た。記憶を思い出してみるが、全く記憶にはない。

その途端、GANTZは転送されていく。転送された切り口は青く、そしてゲームなんかでよく見る、データの塊の様だ。

僕は手をGANTZから離す。するとGANTZは完成に転送された。GANTZが載っていた台車にはへこみすらない。これは台車が凄いのか、それともGANTZの仕業なのか今になつては分からぬ。

すると頭の痛みは消え、体にはリバウンドの様に緊張感なら解き放たれ、ゆっくりとベットに座り込む。ベットは軽く軋みながらも直ぐに終わる。

「茜、知つてゐる事を話して来れ」

「うん、わかった」

僕はゆっくりと口を開け、喋り始める。

「1年くらい前だつたかな」

そうして僕は一拍空けて、また喋り出す。今度は真剣に

「1年前、僕は学校の帰りに友達と話しながら歩いていたんだ。そこでちよつとした事があつて、その友達が車に跳ねられそうになつたんだよね。それで僕、友達を助ける為に走つて、友達を突き飛ばして、友達を車の前から退けたんだよね。そしたら案の定、車に跳ねられて、目が覚めたらあの『黒い玉』が目の前にあつた。したら、急に星人と戦えって言われて、僕、死に物狂いで星人達を殺したんだ」

すると僕の目から涙が零れる。たが僕は涙に気づかないで喋り続けた。

「そのうち、星人を殺すのが楽しくなつてきて、何だが自分が自分が無くなつて、そしたら、そこで出来た大切な人が目の前で死んでいつて、僕もう死にたかった、えつ？」

その瞬間、僕は誰かに抱き締められた。強く、優しく、そして包み混むように。

「茜は、茜は悪くありません。茜はもう、こんなにも泣いて、その人達への償いは済んだはずです」

火織お姉ちゃんの言葉は、僕の凍結した心にゆっくりと染み渡たり、そして凍結した心を溶かしていく。

「でも、僕は明里さんを助けられなくて
僕は思い出すのさえ辛かつた。」

「なら、今度は私が守ります。私の命は貴方に委ねます。そして茜の命を私に委ねて下さい」

火織お姉ちゃんは更に強く、優しく僕を抱き締めてくれた。

「はい」

僕の心の氷は完成に溶け、心から返事が出来た。

「嬉しいです」

火織お姉ちゃんの顔は僕を魅力し、そして虜にする様な笑顔になる。

「もういいかな？」

スタイルのそんな言葉で僕達は慌てて離れた。そして離れた火織お姉ちゃんの頬を見てみると、頬は赤くなっている。
多分、僕も赤いんだろうな

「じゃあ、聞きたい事は終わつたけど、ここからが本題だ」

スタイルの目は更に怖くなり、顔が真剣になる。

「僕達はある人を助けたいんだ。それを手伝ってくれ」

スタイルは頭を下げながら、まるで大切な物を守るかの様な声で言つてくる。

「私からもお願ひします」

火織お姉ちゃんも続いて、頭を下げる。

「分からぬいけど、僕に出来る事があるなら、僕はやりますよ」

「ありがと」

火織お姉ちゃんが僕に抱きついてきた。体には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わる。

「あれ？火織お姉ちゃん、喋り方変わった？」

「茜にはもつと私を見てもらいたいから、そんなにきつい敬語は無しにしたいです、から」

火織お姉ちゃんは僕に断れたくないのか、声を震わせながら言つてくる。

僕の答えは

「嬉しい」

僕がそう言つた瞬間に、更に強く抱き締めてくる。

「そうだ、スタイル」

「なんだい？茜」

スタイルは僕の声に不思議そうに返してきた。

僕がスタイルに聞きたい事は

「あの炎つてなんなの？」

一一六（前書き）

感想待つています。

「あの炎つてなんなの?」
僕がそう言つた瞬間に二人が呆れ顔なのか、それともただビックリしたのか、スタイルは少し口を開け、僕に抱きついている火織お姉ちゃんは固まっている。

「どうしたの?二人共」

すると二人が思い出したかの様に喋り出す。

「いや、その」

火織お姉ちゃんはまるで氣を使つてるみたいに、口を二つもらせながら、そう言つ。

「あれは魔術だよ」

スタイルのあり得ない言葉に、僕は呆然と固まつた。

あり得ないよね。だつて魔術つて、あつ、でもGANTZもあつたしそうして僕は無理くりにでも、自分に理解させた。例え分からぬ事があつても。

「理解しようとしてるけど、理解しきれてないようだね」
スタイルが心配なのか、上から目線で言つてきた。

「理解出来た方が凄いでしょ」

僕はスタイルの言葉に理論的にではなく、客観的に返した。
「だつて魔術つて、例え存在しても僕からしたらあり得ないし」

するとスタイルが軽く悩みながら、ある事が閃いた様で喋り出す。

「見た方が早いだろ？」「あそこに行こうか」

「あそこですか」

スタイルと火織お姉ちゃんのそんな言葉に僕の頭には？が浮かぶ。すると火織お姉ちゃんが僕から離れて、床に立ち上がり、僕に手を差し出してきた。

「行きましょうか」

その言葉が耳に入ってきた瞬間に、僕はゆっくりと手を伸ばし、火織お姉ちゃんの手を握る。その途端、僕の心はトクンて揺れる。すると手には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わってくる。それは優しく心を温めてくれた。

それは嬉しく、僕の中に広がっていく。

「うん」

と僕はその嬉しさのまま立ち上がり、廊下へと出た。廊下は10mぐらいのストロークが続いている。そしてそんなストロークの中には20個ほどの窓が付いている。

「いひちだよ」

スタイルの声に従い、僕は火織お姉ちゃんと手を繋ぎながら歩く。すると廊下には僕達の足音が響き渡っていく。

20個も付いている窓からは多分、季節は夏とギリギリ言える、7月下旬ごろの陽光が照り刺している。だが、そんな暑そうな陽光とは裏腹に廊下には冷たい空気が漂っている。

「そう言えば火織お姉ちゃん

すると頭にある事が浮かぶ。

「なんですか？」

それは

「何で僕、女装してるの？」

「イヤでしたか？」
火織お姉ちゃんが僕の事を心配してゐるのか、少し声を小さくしながら言ひ。

「イヤじゃないけど、その、恥ずかしいから」
僕はそんな火織お姉ちゃんを見ると、心苦しくなつていいく。

「茜は可愛いから大丈夫です」

火織お姉ちゃんは胸を張りながら、嬉しそうに言つ。が、恥ずかしいのに変わりはなかつた。でも火織お姉ちゃんが嬉しそうになつてゐるのを、見るのは僕も嬉しかつた。

「分かつたよ。火織お姉ちゃん」

と僕は笑顔になりながら、そんな言葉を言つて、この話を終わらせた。

そうして歩いていると、ある部屋の前で止まつた。部屋の扉は木を使い、取つ手と留め具には鉄が使われてゐる。

「ここだよ」

するとステイルは扉をゆっくりと開けると、留め具は軋みながら音を立てる。そしてステイルが部屋に入つていく。

「入りますよ」

火織お姉ちゃんが僕を先導する様に先に入り、僕の手を引いてくれた。それは僕を安心させる様に優しかつた。

「うん」

そうして僕は部屋に入った。

壁にはレンガが使われている。そして絶対にレンガが余つて、作つたのだろう普通のより小さめの暖炉がある。そして木で作られた机が1つと椅子が4人分あった。

「じゃあ、茜」

ステイルが椅子に座りながら話しつけてくる。

「炎を出してくれ」

「分かった」

すると僕は火織お姉ちゃんから手を放して、体の力を抜いていった。

炎を出した時の感覚を。反射的ではなく、心から

その途端に僕の中についた力がつめいでいく。それはゆっくりと僕を蝕み、炎を生み出した。

炎を腕に渦巻く様に纏わせる。

「ステイル、これでいい」

「あ、ああ、君は素晴らしいよ。たつた2～3回でここまで魔力を操るとは」

ステイルは本当に驚いたような様子だが、僕からしたら普通だつた。GANTZの最初だつてそうだ、生きてくつえで掴んだ感覚は体に覚えていかないといけなかつた。

だがステイルの発言に僕は一つだけ引っかかつた。

「ステイル、魔力を操るつて、まだ魔術は使えてないの」

「それについては「私が教えましょ」

スタイルが話してる途中で火織お姉ちゃんが喋り出す。

「私は基本的には使いません。そのため、この刀とワイヤーで戦闘をします」

火織お姉ちゃんは腰にある刀を抜き、僕に見せる様に前に出してくれた。

「魔術を行うにはルーンが必要とされますが、茜はルーンを使わず炎を出していくので、多分、魔力だけで出している力技だと思いますが」

火織お姉ちゃんがそう言い終わるとスタイルが紙を出してきた。紙には20cmぐらいの魔方陣が書かれている。

「これがルーンを組み合わせた魔方陣なんだけど、魔方陣に魔力を通してくれ」

そう言うとスタイルは魔方陣が書かれた紙を机の上に乗せた。

「炎の出し方は分かるけど、魔力の操り方は分からないよ」

僕は事実を述べると、火織お姉ちゃんとスタイルが苦笑いをする。

「先ずはやってみて下さい」

火織お姉ちゃんの超えに後押ししながら、僕は紙に触れた瞬間に、魔方陣がひかる

「なにこれ」

僕は紙に触れた瞬間に、魔方陣がひかる。

「なにこれ」

その途端、肩甲骨辺りに激痛が走る。すると肩甲骨から蝕む様に腕にも痛みが流れしていく。

「つ」

「茜放すんだ！」

スタイルが多分そう叫んだ、だろうが僕の耳には入ってこなかつた。すると僕は倒れる様に机に手を着く。机が少し揺れ、安定感を失つていく。

「茜！」

火織お姉ちゃんの声がゆっくりと僕に伝わつてくる。それは優しく、そして強く、僕の痛みを消していく。

「火織お姉ちゃん」

僕はそう言いながら、ゆっくりと魔方陣から手を放す。その途端、魔方陣に無数の新たな線が浮かび、もう一つの魔方陣を作り出した。

「茜！」

そう火織お姉ちゃんの叫び声が聞こえたと共に僕は、火織お姉ちゃんが僕の手を引いてくれた。すると僕は火織お姉ちゃんの暖かさを感じながら、火織お姉ちゃんに向かつて抱きつく様に倒れ、魔方陣から離れた。その途端、後ろからけたたましい音が耳に入つていく。

「」、れは

スタイルが一瞬、驚き言葉を失う様に、言葉を詰まらせた。

僕はすぐに魔方陣の方に首を動かした。そこには魔方陣から湧き上がる様に水が吹き出ている。そしてその水を新たに出来た魔方陣が凍結させていく。

「この事がおじむとせ」

「これって、いつ言つ魔方陣じゃないの？」

僕は火織お姉ちゃんのあり得なさそうな声に疑問を抱いた。だって魔方陣は魔力を流して、その魔術を出す物だよね。

「いや、この魔方陣は使用者を浮かせる物だ。茜が作り出した魔方陣は別として、もともとあつた魔方陣から水が出る「いつなんて、あり得ないんだ」

スタイルの言葉に僕は理解出来なかつた。

「では茜は魔方陣を再構築したと、そんな事あり得ないですよ」

「分からぬ。だが、魔方陣を調べれば分かるだろ？が、まず茜」スタイルは手で額を抑えながら、疲れた感じかの表情で僕に話し掛けてくる。

「炎を出してくれ」

そう本題を告げた。

「分かつた」

そう言つと僕は感覚を手の平に集中させていく。すると手に何かが集まつていく感じがする。その瞬間、手の細胞とリンクする。

その途端、手の平に炎が生まれた。炎は手の平で熱く、渦を巻く様にぶつかり合い、ボールになつていく。

「これでいいの？」

そう疑問系で僕が聞くとスタイルは「ああ」と淡白に答えた。するとスタイルが僕に向かって、疲れた様に喋り出す。

「そのまま雷を出せるか？いや、そんなあり得ない事を聞いて、わ、悪いな」

スタイルが口を詰まらせた理由は多分これだろう。僕はスタイルが話してた途中で、『雷』を出せるか、と言われた集中に炎に雷を思い描いた。その瞬間、炎が雷へと変わった。雷は空中にある「ミミ」に反発し、手の平で音を立てていく。

「なにが悪いの？」

「いや、茜ならあり得るか」

スタイルはそう咳きながら、自分で処理したようだ。

「もう茜も疲れただろう。明日、インテックスを追つて学園都市に行く」

その途端、僕は理解出来なくなつた。

「インテックス？学園都市？つてなに」

すると一人は思い出したかの様に僕に説明し始める。

「インテックスって言つのは僕達が助ける人さ。そして学園都市って言つのは君と僕達が明日いく場所だよ」

スタイルの言葉に僕は困惑した。

「えつ、明日！？それって最初あつた時に言つてた事に関わりあるね？」

僕は日本語になつてない日本語で話した。多分、頭が回らなかつたんだと思う。

「ああ、あながちあつてるが、聞いていなかつたが茜はいいのか」

「なにが？」

するとスタイルが口をこもらせながら僕に「学園都市に行く事だよ」と告げた。

「火織お姉ちゃんがくるな」

「私も行きますよ」

と火織お姉ちゃんが僕を虜にする様な笑顔で、答えてくれた。

「なら行く」

僕がそう笑顔で言つと一人の頬が赤くなつた。

「じゃあ、茜の了解もえた所で、茜は神製の部屋でも休んでいてくれ」

「うん」

そう言つて僕は立ち上がり、火織お姉ちゃんに手を差し出した。

「はい、捕まつて

だが火織お姉ちゃんは反応しない。と言つた耳に入つてないのかな？

「火織お姉ちゃん」

僕がそう言つと火織お姉ちゃんが反応してくれた。

「あっ、ごめんなさい」

そう言つて僕の手を握つて立ち上がる。火織お姉ちゃんの頬は赤く、そして僕の顔を見てくれない。

「火織お姉ちゃん、僕の事キレイになつたの？」

そう言つと僕の心に寂しさと、悲しさが生まれていく。

「そんな事ないですよ」とちやんと僕の顔を見て、笑顔で言つてくれた。

僕は最後に自分の思いを全て込めて「ほんと?」と言つた。

「はい、茜は大切な弟ですよ」

と火織お姉ちゃんが笑顔で言いながら、その瞬間に抱きつかれた。

「うん」

僕は火織お姉ちゃんに逆らう事なく、受け入れていた。それは多分、嬉しかつたんだと思う。

「では部屋にいきましょうか」

「分かつたよ。火織お姉ちゃん」と僕達は軽く話して廊下に出た。

1-7 (後書き)

原作に入らないよお~。シクシク

1—8（前書き）

原作に入らない。
あと感想を下さい。

僕達は軽く話して廊下に出た。廊下には10mのストロークに、その10mの中に20個ほどの窓がある。そして窓からは先程とは違い、夏とは言えないような冷たい陽光が照らしだされ、僕の肌に突き刺される。

「気温は8 前後と言つた所か

僕がそう思つた瞬間、肌にピリピリとした何かが走り、僕の真をゆっくりと蝕む様に冷やしていく。

「茜は寒くないんですか？」

火織お姉ちゃんが心配そうな声で僕に喋り掛けてきた。火織お姉ちゃんのそんな声を聞くと、不安にさせたくないと言つ気持ちが溢れてかた。

「大丈夫だよ、火織お姉ちゃん」と僕は笑顔で言つた。

「よかったです」

そうして僕達は火織お姉ちゃんの部屋に向かって歩いていく。

廊下には僕達が歩く度に床が少し軋み、音を立てていく。音は廊下の恥まで響き渡るが、その音に反応する者は一切いない。

と言つて、廊下の10mはあるストロークには人が全くいない。

「火織お姉ちゃん」

「何ですか？ 茜」

火織お姉ちゃんは心配と言つて、不思議そうな顔を浮かべて僕に返

してくれた。

そうして僕は息を吸い「何で人がいないの?」と聞いてみた。

「多分、今日はみんな色々やる事があるんだと思いますよ」
火織お姉ちゃんは冷静に答えてくれた。

「そうなんだ」

「はい」

と和む様なテンポと喋り方で話してた。すると僕のお腹から地響きの様な音がなる。その瞬間、普通なら顔だけだろうが、それを通り越して、さつきまで寒かつた体が一瞬で熱くなつていく。

「う、う、うううは」

僕は完全にパニクつて呂律が回つていない。すると火織お姉ちゃんがクスと、可愛らしく微笑むと僕に抱きついてきた。火織お姉ちゃんの腕が軽く僕に食い込み、そして暖かさが伝わつてくる。

「そう言えば、もうお昼でしたね」

火織お姉ちゃんがそう落ち着いた感じで言つと、僕はある事が気にかかつた。

それは「火織お姉ちゃん、今更だけど僕つて何時間ぐらい寝てたの?」

とほんとに今更の事だった。

「えーと、茜が此方に来たのが12時くらい、つまり深夜0時で起きたのが11時くらいなので、だいたい10・30分くらいですよ」
火織お姉ちゃんによる簡単な説明で僕はある事が分かつた。それは僕が死んだ時間と連動している、と言つ事だ。

「ありがと火織お姉ちゃん」

僕はそう笑顔で言つと、火織お姉ちゃんが僕から離れていく。すると僕の心が何故か寂しく、悲しくなつていいく。それは泣く様な悲しさではなく、ただ火織お姉ちゃんを、求めていただけなのかもしない。

「はい、では時間も時間ですし食事でもしますか」

火織お姉ちゃんが僕に気を使つてそう言つてくるた。僕はそれに甘えて「うん」と言つた。

そうして僕達は火織お姉ちゃんの部屋に行くのではなく、食事をする場所、多分、食堂と呼ぶであろう場所に向かつて歩き出した。

「茜は何か好きな食とかはあるんですか？」

火織お姉ちゃんが興味津々にそう聞いてきた。

その瞬間、僕はすぐに

「火織お姉ちゃんが作ってくれたら何でもいいよ」と返した。

「ふえっ」

火織お姉ちゃんは顔を真っ赤にしながら、そんな可愛らしく声を上げる。その声は僕の心をくすぐつていく。なんか萌えーー、なのかな？

「可愛いよ、火織お姉ちゃん」

僕はそう言いながら、火織お姉ちゃんの手を握つた。すると手には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わり、僕の中に嬉しさを生んでいく。

「あ、あ、あ茜、そのえつと」

火織お姉ちゃんの呪律は回っていない。と言つたがタジつてゐるのかな。

「どうしたの？火織お姉ちゃん」

「あ、あの、その」

火織お姉ちゃんは僕の声に必死で反応しようとしながら、両手の指を回しながら、モジモジと言つ。そんな仕草はすぐ可愛いくて、僕をくすぐつていく。

「イヤだつた」

僕がその言葉を言つた瞬間に、火織お姉ちゃんは「違います！」と叫んだ。声は廊下を響き渡り、反響をしていく。

「火織お姉ちゃん？」

「あつ、ごめんなさい」

と僕に気を使う様に火織お姉ちゃんは誤つた。その途端、僕は火織お姉ちゃんを抱きしめた。何方かと言えば抱きついたが正しい表現だろうか。

「ごめんね。火織お姉ちゃん」

「えつ」

突然の謝罪に火織お姉ちゃんは、驚いた様な顔をしている。

「何で急に」

火織お姉ちゃんの問いに答える、為にゆっくりと息を吸い

「火織お姉ちゃんが好きだからだよ」

と言つた。その途端、僕の心臓はトクンと大きく揺れ動いた。そうして僕はゆっくりと火織お姉ちゃんから離れた。

すると心臓はまた大きく揺れしていく。だが、そんな事を僕は無視した。

そうして笑顔を作りながら

「火織お姉ちゃん」

「ひえ

火織お姉ちゃんはそんな驚いた様な声をあげる。声は軽く裏返り、少し感高くなっている。

僕は声に気づかない振りをしながら、火織お姉ちゃんの手を掴み

「行こ」

と言った。すると手には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わり、ゆっくりと手に力を入れていく。そうして僕は火織お姉ちゃんと手を繋ぎながら、食堂に向かって歩き出した。

1-9 (前書き)

あと2011年も少しですね。

はー、今年も早かつた。と言つた中学校に入った事以外なにもなかつた。あー、あと練習のかいあつてか、両声類になつて女声が出る様になりました。

そして今はガキ使の『笑つてはいけない』見でます。

では本編をどうぞ

食堂に向かつて歩き出した。

歩き出すこと5分。僕は火織お姉ちゃんの手を繫ぎながら、先導する様に歩いていたが、食堂の場所を知らない僕が先導なんて出来なかつた。その為、途中から火織お姉ちゃんに先導をしてもらつた。

そうして僕達は食堂の扉まで来た。やつぱりと言つていいだろうが、扉は木材で作られている。そして扉からは、ほんのりといい匂いが流れている。

「入りましょうか」

火織お姉ちゃんが美しく、可愛いらしい笑顔で僕に言つて來た。

「うん」

と僕はそう言いながら、僕達は食堂に入つた。

すると目には時代の良し悪しを感じる様な光景が入つてくる。食堂は先程の木材感とは売つて違つて、コンクリートかな? そんな感じの物を使って作られていた。それは建物が完全に変わつている感じだつた。

その光景に僕は啞然とした。やつぱりあれかな。現代の社会構成かな。

「火織お姉ちゃん凄いね」

「何ですか?」

火織お姉ちゃんの顔には、僕が何を言つてているのか分からぬ様な、不思議そうな顔をしている。

やつぱり、慣れちゃうと氣にならないのかな？

「いや、その急に現代的になつて」

火織お姉ちゃんはさつきの不思議そうな顔から、急に思い出したかの様な表情を浮かべながら喋り出す。

「それですね。この食堂は昨年出来たばかりなので」

「納得したいけど、ペリローに出来ない様な感じだね」

「そうですね」

火織お姉ちゃんとそんな簡単な話しが、食を頼む為のおばちゃんがいるカウンターに向かつて歩く。

歩いていると分かるのが、食堂は体育館並に大きい。そして、その大きな食堂の3分の2・5ぐらいが、ロングテーブルと椅子で埋めつくされている。

そうしてカウンターに着いた。

カウンターにはおばちゃんが一人と、2個のメニューがある。すると火織お姉ちゃんがメニューを見ないで、食を頼み始める。

「私は蕎麦を、彼には」

「同じで」

火織お姉ちゃんを待たせない為に僕はそう答えた。もつと簡単な理由で言ひと、メニューの文字を見て分かるのが英語だ。つまり中も全て英語だらう。絶対に読めるはずがない。

するとおばちゃんは分かつた様で、蕎麦を受け取りにカウンターの中に入つていく。

その途端、僕はある事に気づいた。それは

「あつ、そうだ火織お姉ちゃん」

「何ですか？」

「お金ついでどうするの？」

そうお金だ。僕はここに来るまでにGANZNを行っていた。つまりお金を持ってくるはずなんかな。

「ふふ、大丈夫ですみ

そう火織お姉ちゃんは軽く笑うと、微笑みながりさう優しく言った。

火織お姉ちゃんの優しさは僕に伝わってくるが、

「いや、普通ダメじやん

するとおばちやんが蕎麦を乗せた2つのプレートを持って来た。

「はい蕎麦だよ

おばちやんがそう言つと、火織お姉ちゃんはプレートを握る。

「ありがとうございます」

とおばちやんは普通に流しているが、あり得ない。だって食事だよ。お金こるはずだよね。

「どうも

僕は一人取り残されたくない為、流れに合わせてプレートを握る。

すると手には蕎麦の熱が生ぬるべ云わつてくる。

「行きましょうか

火織お姉ちゃんはそう言つと、ロングテーブルに向かって歩いてい

く。それに着いていく様に足を動かす。

「火織お姉ちゃん、コレってどういうこと?」

僕の中にはそんな言葉しか、浮かび上がらなかつた。

「この食堂は無料なんですよ」

と火織お姉ちゃんは当たり前の様に言つ。が普通ならあり得ない。まあ、慣れていこう。そう僕は深く心に刻んだ。

そうして僕達は返却カウンターに近い席に座つた。そこからはずつくじと首を回し、周りを見てみると全く人がいない。

すると火織お姉ちゃんが箸箱に指を入れる。すると5～6回、陶器と陶器がぶつかり合つ、甲高い音がする。そうして火織お姉ちゃんが箸を取つて、僕に渡してくれた。

「ありがと」

僕は箸を受け取る。すると火織お姉ちゃんの指と、僕の指がぶつかり合つ。

「「あっ」

僕と火織お姉ちゃんはそんな声を口から出した。その途端、火織お姉ちゃんの頬が赤くなつていく。

そんな火織お姉ちゃんの顔を見ていると、僕の顔が熱くなつていいく。多分、僕も赤いんだろうな。

そうして少しだけ沈黙が僕達の間を支配した。

僕はこの状況を打破すべく、口をゆつくりと開く。そうして

「食べよっか」

と勇気を振り絞つて言つた。普通ならこんな事に勇気なんていらないんだろうな。

「はい」

火織お姉ちゃんは恥ずかしそうな声で、そう返事をしてくれた。それは凄く可愛いだろうが、僕は火織お姉ちゃんの顔をあまり見れなかつた。

そうして、ゆっくりと一拍置き

「「いただきます」」

火織お姉ちゃんとハモリながらそう言った。

僕は箸で蕎麦を掴み、口に入れた。すると口の中には蕎麦の美味しいと、出汁と中に入っていた鳥肉、ネギの美味しさが広がっていく。

「美味しい」

僕の口からは無意識に、そんな言葉が出た。

この味で無料なんだ。

「美味しい様で何よりです」

火織お姉ちゃんもそんな事を言いながら、蕎麦を口に運び、食べた。

「火織お姉ちゃんって蕎麦好きなの？」

「そうですね。一様蕎麦や和食関係は何でも好きですよ」

火織お姉ちゃんはそう返してくれた。

そうして僕達は軽く話しながら食事を終わらした。

「「「うちさつさまでした」」

火織お姉ちゃんと合掌をしながら、そう言った。

僕達は立ち上がる。するとある事に気づいた。それは最初よりも、数人だけ人が座っている。

そうしてプレートを握り、足を返却カウンターに向けて動かした。

返却カウンターは省スペースで作りたかったのか、約1mぐらいの幅にプレート」と食器を入れる様になっている。

プレートを返却カウンターに僕達は入れる。

「では、私の部屋に行きましょうか

「うん」

そうして僕達は火織お姉ちゃんの部屋に向けて歩き出した。

一一一〇（前書き）

2012年になつたけど、全然そんな感じがしない。むしろまだ2011年であつて欲しいよ！

今、僕は火織お姉ちゃんと廊下を歩いている。廊下はあいかわらず長く、そして寒かった。

すると火織お姉ちゃんが優しく僕の手を握る。その途端、火織お姉ちゃんの暖かさが、ゆっくりと僕の手から腕に渡る様に伝わっていく。

その瞬間

「火織お姉ちゃん！？」

と僕は甲高い、ビックリした様な声が出た。

すると体の真から、熱くなつていいく。熱は身体中にゆっくりと回って、体の起動回路をショートさせていく。

「どうしました？」

火織お姉ちゃんは僕の行動を不思議に思つたのか、そんな事を僕に聞いてきた。

「いや、その」

すると火織お姉ちゃんは軽く首を傾げる。火織お姉ちゃんの長い黒髪は、流れる様に床に近づいていく。その姿は可愛い様で、美しくかつた。

その途端、僕の頭には沈黙が走る。それは僕を支配する様に広がつていいく。

「何でもない」

と僕は恥ずかしさを抑えながら、そう言つた。

火織お姉ちゃんは首を元に戻すと、優しい笑顔を浮かべながら「なら行きましょうか」
そう言った。

そうして僕達は火織お姉ちゃんの部屋に向かつて歩き出した。

約8分ぐらいが経ち、部屋の前に着いた。

扉もやはり、木材で作られている。だがそれ以外に特に変わった様子もない、普通の扉だった。

「では、どうぞ」

火織お姉ちゃんが扉の取っ手を掴み、そして手首を回しながら取っ手を引き、扉を明けた。

すると扉に使われているであろう、留め具が軽く軋みながら、音を立ててている。

そうして扉は完全に開き、僕達は部屋に入った。

そこには綺麗に片付けられた、部屋にタンス、ベットが一つがある。奥には扉があり、もう一つの部屋があるようだ。そんな光景が僕の目に入ってきた。

光景的には殺風景だが、そんな光景も、火織お姉ちゃんらしい感じもしている。

「えー、いま座布団を用意します」

火織お姉ちゃんはそう言つと、奥にある扉を開け、部屋に入ろうとする。

「別に大丈夫だよ」

僕がそう言つたが、火織お姉ちゃんの耳には入らなかつた様で、その

まま部屋に入つていつた。

まつ、いつか

すると火織お姉ちゃんが座布団を一つ持つて、部屋から出でてきた。

「どうぞ」

火織お姉ちゃんはそう言ひながら、座布団を床に置いた。

「ありがとうございます」

僕は火織お姉ちゃんの敬語と、部屋の感じに飲み込まれて、軽く緊張していた。

そうして僕は座布団に足を引くより座る。簡単に言えば正座だろう。

火織お姉ちゃんも僕に続く様に、座布団を僕の前に置き、正座をしながら座つた。

すると僕達の間を沈黙が支配した。それは時間感覚さえも狂わせる程に凄まじかつた。

「あ、茜」

火織お姉ちゃんが勇氣を振り絞る様に、僕にそう話しがけた。

「な、なに」

僕は火織お姉ちゃんの声に、驚きながら少し甲高い声でそう言つた。

「あの、その」

その瞬間、僕の中にある事が浮かんだ。それは、このままだつたら沈黙が続く。そうそれだつた。

僕は何か色々な物を振り絞りながら、火織お姉ちゃんに

「火織お姉ちゃんの事、沢山教えて
笑顔を作りながら、そう言った。

「はい」

火織お姉ちゃんが返事をしてくれた所で、火織お姉ちゃんは喋り続ける。

「そうですね、私の事と言つても、天草式のトレーニングぐらい
しか話せませんが、いいですか？」

「火織お姉ちゃんの事だつたら、何でもいいよ
僕がそう言つと、火織お姉ちゃんは笑顔になりながら、話し出す。

「そうですね、今から3年くらい前に遡ります」

火織お姉ちゃんはゆっくりと自分の過去を話し始める。

「3年前、私は天草式で魔術や、武術のトレーニングに明け暮れて
いました」

そうして火織お姉ちゃんの話は、1時間ぐらい続いた。

そうして火織お姉ちゃんの話が終り、僕達は1500mトラックに
来ていた。

服は火織お姉ちゃんから借りた、黒いジャージを着ている。

すると僕の体はある事を感じた。それは多分これだろう。
肌に感じる気温は、走りやすい涼しい風が僕に向かって吹き抜けて
いく。

そんな風とは裏腹に、体には夏下旬の様な、ビヨニーな陽光が僕の
肌に突き刺さる。

そして足元のトラックには、一人分の場所を表す、ラインが引かれている。

何故、僕達がトラックに来たかと言つと、暇な時間があるなら走つてみたい。と僕達が体育会系だと分かる様な、願望できていた。

僕はゆっくりと右足と左手を後ろに引き、体を前に倒す様に構える。

「では、走りましょうか」

「そうだね」

そうして僕達は走り出した。

体を倒す様にして、足は回す様に動かしていく。

「速いですね」

「そう」

そんな風に軽く喋りながら走つていく。

走る度に涼しい風が僕にぶつかり、走りやすくしていく。

そして走つてる内に、僕達がバカだと気づいた。

肌には先程とは明らかに違う、陽光が肌に突き刺さる。

足元にあるトラックには少しオレンジじみた光で、トラック全てを照らされている。

そう今はもうPM6:00だ。

僕達が走り出したのは多分、PM1時ぐらいだろう。それから5時間、僕は火織お姉ちゃんと話しながら走つていた。今になってから思つ。何で気づかなかつたんだろう。

「シャワーでも浴びますか

「だね」

しかも息が全く上がりていないので不思議だ。

そして僕達はシャワーを浴びる為に、入浴場に向かって歩き出した。

1-1-1 (前書き)

何となく2話投稿。

僕は今、シャワーを浴びる為に、火織お姉ちゃんと廊下を歩いている。廊下にある窓からは夕日の光が差し込み、廊下一面を淡いオレンジじみた色に染め上げている。

そして廊下は朝とは売つて違う、そこまで寒くはない。まあ何方かと言つと、さつきまでのランニング、いや長距離走かな、どっちでもいいけど。取り合えず走ったせいかな？

そんな事を考えていると入浴場の前に着いた。入浴場には日本らしい暖簾が掛かっている。

ここ外国だよね。

今の僕からしたら、そんな事はどうでもよかつた。僕の田にはそれ以上に大変な物が入つていて。

それは暖簾にあつた。

暖簾は赤く塗られ、真ん中には『女湯』と白い糸で刺繡されている。

「えーと、火織お姉ちゃん」

「何ですか」

僕達はゆっくりと息を吸い、そして喋り出す。

「何で『女湯』しかないの？」

「女湯しかないから、ないんです」

火織お姉ちゃんはそう堂々と宣言するが、普通なら男湯もあるよね。

「いじつて男湯ないの？」

「ありますよ」

火織お姉ちゃんはまたしても堂々と宣言するけど、じゃあ何で。その途端、僕の中にある事が浮かぶ。

「じゃあ、なんで女湯なんかに」

それは

「一緒に入りたいからです」「やつぱり

「あはははは」

僕の口からは、そんな笑い声しか出なかつた。

「では入りますよ」

すると火織お姉ちゃんは僕の腕を掴む。腕には火織お姉ちゃんの力が入り、そのまま女湯に入ろうと引っ張る。

「キヤー——————」

そして、そのまま僕は火織お姉ちゃんに引きづられながら、女湯に入つた。その瞬間、僕の視界が消えた。消えたと言つ表現よりは、真つ暗になつたの方が正しいかな。

「なに? これ

「流石に裸を見られるのは気が引けるので」
すると火織お姉ちゃんが服を脱ぎ始めたのか、火織お姉ちゃんが黙り、何かがこする音がする。

その瞬間、僕の体が燃える様に、熱くなつていく。頭の中には火織お姉ちゃんの。

僕の起動回路がオーバーロードした。多分、顔は凄く赤いだろうな。

「私は脱ぎ终わつたので、次は茜のを」

火織お姉ちゃんのそんな声がしたと思ったら、右腕が何かに掴まれ、圧迫される。

「火織お姉ちゃん！」

僕はすぐに火織お姉ちゃんと分かり、軽く叫ぶ様に、そんな声を出した。

「どうしました？」

火織お姉ちゃんは自分が何をしているのか、分かっていないのか、そんな声を出した。

「どうしました、じゃないよ！火織お姉ちゃん何しようとしてるの？」

「茜の服を脱がせ様としている、だけですが」

火織お姉ちゃんはそう堂々と宣言するけど、普通はあり得ないよ。やつぱり火織お姉ちゃんって、どつかズれてる。

「他人が来たらどうするの？」

「大丈夫です。今日は私達の貸し切りですから」
仕組まれていた。僕の中で何かに負けた。

そのまま僕は抵抗する事なく、素直に火織お姉ちゃんに服を脱がしてもらい、シャワーを浴び始める。

体にはシャワーから出された、お湯が掛かり、ゆっくりと僕の体を温めていく。

「どうですか茜？」

「気持ちいい」

僕はシャワー室に響く様に聞こえてきた声に、思った事をそのまま答えた。

「では頭を洗いますね」

「うん」

僕の視界は相変わらず暗闇のままだが、会話は成り立つた。すると火織お姉ちゃんが僕の頭に触れた。火織お姉ちゃんの手にはシャンプーがあるのか、少しだけ冷たい。

「洗つていきますね」

火織お姉ちゃんの手がゆっくりと動き、髪を絡める様に洗つていく。すると優しく僕の頭を刺激し、僕は気持ち良くなつていく。

「どうですか?」

「気持ち良いよ」

そうして僕は火織お姉ちゃんに髪や体を洗つてもらい、30分ぐらいでシャワー室を出た。

脱衣所に入ると、僕の濡れた体は脱衣所の気温により、冷やされて冷たくなつていく。

「では私が着せます」

「お願いします」

すると火織お姉ちゃんは「はい」と優しく言いながら、僕に服を着

してくれた。

そうして5分ぐらいが経ち、僕達は服を着終わった。

「では目の布を外しましね」
そう言いながら、火織お姉ちゃんが僕の視界を潰していた『布』を外そうとする。
布だったんだ。

「取りますよ」

「はい」
火織お姉ちゃんの声にそう返事をすると、目に光が入ってきた。僕は反射的に目を閉じた。

「取りましたよ」

そう聞こえると僕はゆっくりと目を開ける。すると光が目に突き刺さる様に差し込み、悠つ感を覚えさせる。

「どうですか？」

「目が痛い」

火織お姉ちゃんの声に僕は冷静に答えた。実際ビリヨーにだけど痛かつたし。

「大丈夫ですか」

「大丈夫だよ」

火織お姉ちゃんの心配そうな声に僕はそう答えた。すると火織お姉ちゃんはゆっくりと肩の荷が降りたかの様に、肩が降ろされた。

その瞬間、僕のお腹が地響きを立てる様になった。

「ふふ、では夕食時ですし食堂に向かいりますか」

火織お姉ちゃんは優しく微笑みながらそう言つてくれた。

僕の体は冷やされたはずなのに、一瞬で真から熱くなつた。それは体の動きを遅くする様に。

だけどそんな中で僕はある事に気づいた。

「火織お姉ちゃん一つだけ聞かせて」

「何ですか？」

火織お姉ちゃんは何も分からぬ様に聞き返してきた。

そんな火織お姉ちゃんに言つた為に、僕は息を吸い

「何で僕の服が変わつてるの？」

そう言つた。

僕の服は火織お姉ちゃんと同じ、白いTシャツに左の太ももを露出したジーンズを履いている。髪も同様にポニーテールにされている。

「私がお揃いが良かつたからです」

火織お姉ちゃんは堂々とそう答えた。

「火織お姉ちゃん凄く嬉しいんだけど、その、ちょっとこじょばゆいよ」

「それなら私も嬉しいです」

そうして僕達は食堂に向かつて歩き出した。

1-1-2 (複数形)

感想を下せ。

僕は今、火織お姉ちゃんと食堂の前に来ていた。食堂の扉からは美味しそうな匂いがほのかに流れている。それは僕の食欲を刺激していく。

「茜入りましょうか」

「うん」

僕は火織お姉ちゃんの声にそう答えると取つ手を掴み、手首を回しながらゆっくりと押す様に力を入れ、扉を開いた。

すると僕の目には扉や、この木材で作られた建物とは売つて違う、コンクリートの様な壁で作られた現代的な光景が入つて来た。やはり慣れない光景だよ。

それに昼間とは違つて、食堂の半分ぐらいが人で埋め尽くされている。

僕がそう思つていると火織お姉ちゃんが背中を押す。

「行きますよ」

「分かつてるよ」

そつして僕達はカウンターに向かつて歩き出した。

カウンターは幅1mぐらいで作られている。そんなカウンターの中にはおばちゃんが1人とメニューが2つある。メニューのタイトルは英語だ。これを見て僕は理解した。多分、中も全て英語だらう。

「ううん

火織お姉ちゃんがそう言つと僕は続け様に「同じで」と言つた。と言つかメニュー見れないし。

「あいよ

おばちゃんはそう言つと、カウンターの奥に入つていった。

「それにしても、今日は人がいなはづじやないの?」

僕はふと思いついたかの様に、火織お姉ちゃんに問い合わせた。

「そのはずだつたんですが

火織お姉ちゃんは苦笑いをしながら、そう言つた。

その瞬間「神製、茜」と沢山の人がいる中からそんな声がした。僕は声が聞こえた瞬間、反射的に戦闘体制を取るかの様に、右足を大きく回しながら、体を声の方に向けた。

戦闘のクセつて抜けないものだろうな。

すると火織お姉ちゃんは、1テンポ遅れて声の方に体を回した。

「スタイル」

体を回した、火織お姉ちゃんはそんな声を出した。

そこにはスタイルと、金髪のロングヘアの女性がいた。女性は僕が着ていた修道服とは違い、薄つすらとしたピンクの修道服を着ている。

「空いてるよ」

スタイルは隣の席を指刺しながらそう言つた。

「ありがと」

スタイルに感謝を込めながら、僕は笑顔で言つ。すると何故かスタイルや火織お姉ちゃんの頬が赤くなる。あと僕の事を知らない金髪の女性までもが赤くなる。

僕の頭は意味不明になつた。

すると後ろでおばちゃんが、うどんが出来たよつて「出来たよ」と言つてくれた。

僕と火織お姉ちゃんはまたカウンターの方を向く。そこにはプレートの上に器に入った、うどんがある。僕達はプレートを握り「ども」と言いながら、スタイルの方に歩き出した。

スタイルが座つている場所は、瞬間に僕達が座つていた、返却カウンターに一番違つところだ。

そうして僕達はスタイルがいる机まで来た。火織お姉ちゃんはスタイルの横にある、空いている席に座る。僕も続け様に空いていた、金髪の女性の横に座つた。

「最初にこんばんは茜」

「こんばんはスタイル」

と僕は挨拶をしてきたスタイルに、そう笑顔で返した。

「こんばんはです。スチュアートさん」

火織お姉ちゃんは何か緊張しているのか、ベリーパーに固い敬語を使う。

「「んばんは神製。それと」

「彼は神田 茜です」

氣を使つてくれたのか、スタイルは僕の自己紹介をしてくれた。

「「んばんは茜」

女性は挨拶をしてくれたが、僕の口からは「えーと貴方は」と言つて言葉しか出なかつた。

「私はローラ スチュアートよ。気軽にローラお姉ちゃんって読んでね」
その途端、僕の頭はクリアになつた。と言つたか何も考えられなくなつた。

「えつと、その」

「早く」

女性は僕を急かす様にそんな言葉を僕に向ひつ。

心拍数が分かる程に上がつていき、大きく息を吸いながら、勇気を振り絞り、

「ローラお姉ちゃん」と言つた。

僕がそう言つた瞬間にローラお姉ちゃん抱きついてきた。それと同時に足に痛みが走る。

「ちょっと離れて下さー」

「敬語イヤ」

ローラお姉ちゃんは、悲しそうな顔で僕を見つめながら呟いた。

反則だよ

「分かつたよ。でも離して」

「ありがと、でもイヤ」
そう言いながらローラお姉ちゃんは更に強く僕に抱きつき、足の痛みは増加していく。

「火織お姉ちゃん辞めて」

「だつたらスチュアートさんから離れて下せこ」

「私は離れないわよ」

一人は完全に僕を蚊帳の外にしながら、口論を始める。

「茜は嫌がってるじゃないですか」

「推測は辞めなさい。私はまだ茜の口から、そんな事を聞いていません」

一人の口論は段々と激しくなっていく。

「茜は優しいので、そんな事を言えないのです」

「そんな事ないですよね、茜」

「僕にフラれても」

僕は助けを求める為に目を流しながら、スタイルを見た。

「やついいから食べよつよ
「もうひとスタイルも同様に田を反りした。

「そうですね
「わいわいから食べよつよ

「ええ

一人は僕の意見に納得していく様で食事を始める。
箸を握り、僕はつどんを食べ様とする。

「茜

「なに? ローラお姉ちゃん

顔をローラお姉ちゃんの方に向ける。そこには箸を握ったローラお姉ちゃんがいる。箸にはローラお姉ちゃんの食事であるつ、焼き魚が摘まんである。

「あーん

「ふえ

驚きのあまり、僕の口からはそんな間抜けな声が出た。

「あーん

「本気

僕は聞き返してみた

「マジだよ。じゃあ、あーん

ローラお姉ちゃんがそう言った瞬間、僕は覚った。なにを言つてもダメだな。

「あーん」

僕は諦めて素直に口を開いた。

「あーん」

ローラお姉ちゃんの箸はゆっくりと僕の口に入つてくる。口を閉じたと同時に、ローラお姉ちゃんは箸を口から抜いていく。

箸が完全に抜け、僕は焼き魚を噛む。すると魚本来の味と、塩の旨さが広がっていく。

僕は無意識だけど笑顔になつてゐるだろ？

その途端、肌には痛い程の視線が刺さり、一瞬で僕の笑顔は失われた。

ゆっくりと首を動かし、視線の先を見ようとしたが怖すぎて直視出来なかつた。

そんな怖すぎる中で僕達は食事を済ませた。

1-1-3 (前書き)

書いていると疲れ以上に何か頭が真っ白になっていく。
そしてアイデアばっかが溜まって書けない。

夕食を済ませた僕は外に来ていた。

太陽は落ち、空には闇が広がっている。光と言つ物はなく、ただ1人僕は闇の中にいた。

「今日は色々な事がありすぎたよ」

僕はゆっくりと朝の事を思い返す。

「ここに来てスタイルや火織お姉ちゃんと出会った。それにローラ

お姉ちゃんとも」

その瞬間、僕の中には何かが生まれた。それは強く、そして僕を殺す様に締め付けていく。

「夢のあいつが言つてる方が正しいのかな？」

手を空に上げ、自分を見つめる様に言つた。だが答えは返つてくるはずもなく、体には怒りともよく似たなにかが蝕む。

「取り敢えず、生きてみるか」

僕は体を落ち着かせる様にそう言い、火織お姉ちゃんの部屋に向かつて歩き出した。

その瞬間、背中にぶつかる様に風がおきる。風により髪は空中を舞い、僕は押し出される様に協会の中に入った。

そのまま気にする事なく、足を火織お姉ちゃんの部屋に向かつて進めた。

廊下の電球には電気が流れ、オレンジ時見た光を放つていてる。

窓から光とは売つて違う、冷たい闇が広がっている。

「温度差が激し過ぎるよ」

僕は肌で感じ取った事をそのまま口にし出した。事実、外では多少だが、肌にピリピリとした何かが刺さっていた。廊下は暖房が入っているのか熱い。

と言つが夏。いや下旬だからな

僕は自分自身で勝手に納得すると、再度、火織お姉ちゃんの部屋に向かつて歩き出した。

歩く度に靴は床と擦れる、ぶつかり合い音を立てていく。音は廊下全体を巨大な筒の様に響き渡つていく。

そうして歩いていき、10分ぐらいで火織お姉ちゃんの部屋の前に着いた。

部屋の扉は僕の目から見たら、やつぱり珍しいよ。木材で出来ているし。

僕は手首を揺らす様に扉をノックする。すると扉は甲高い音がなる。

「火織お姉ちゃん入るね」

そう言いながら右手で扉の取っ手を握り、手首を回しながら扉を開く。扉の留め具は軋みながら、周りに響く様に音を立てる。

僕は気にしないで部屋に入り、右手で取っ手を握ったまま、右腕から手首に掛けて後ろに大きく揺らし、扉を閉めた。

部屋の中にはベッドに座った、火織お姉ちゃんがいる。

「火織お姉ちゃんただいま」

僕がそう言つと火織お姉ちゃんは笑顔で「お帰りなさい茜」と優しく言つてくれた。

「火織お姉ちゃん、いま何時」

「午後11時です」

火織お姉ちゃんの言葉に僕は啞然とした。
理由は簡単だ。僕が外に出たのは10時、つまり1時間も僕は外にいたんだ。

「どうしましたか。茜？」

火織お姉ちゃんが心配してくれたのか、そんな言葉を僕に掛けてくれた。

「いや、ちょっとね。何か1時間も外にいたんだなって」

「ええ」

火織お姉ちゃんはそう頷いてくれた。でも、少しほフオローハしてよ。

その途端、扉が急に開いた。扉は僕を襲う様に向かってくる。

「うわっ！」

僕は前に倒れる様にして扉を交わす。

そして体制を何とか持ち直し、体を扉の方に向ける。

そこには、こんな光景が目に入ってきた。

火織お姉ちゃんが刀を出し、そして扉を開いたであろうスタイルの首筋に添えている。

「スタイル、何をしたか分かりますか」

火織お姉ちゃんの声は怒りを帯びた様に震えている。

「分かつた。分かつたから」
スタイルがそう言つと、火織お姉ちゃんはゆっくつと刀をスタイルの首筋から離した。

「茜」

そんな声が聞こえると同時に、スタイルの後ろから金色の長く美しい髪を靡かせながら、誰がが方に抱きついてきた。

「えつ」

僕はそんな声を出しながら、立ち直したはずの体制がベッドに勢いよく倒れた。

ベッドは大きく揺れ、そして軋む様な音を立てる。

だが僕は音を聞く余裕すらなく、背中に痛み、いや、物理的に何かがぶつかつた様な感覚が走る。

「つ誰？」

首を動かし、抱きついてきた合いでに姿勢を向ける。

そこには自分の2倍はあろう長じ髪を後ろで結び、そして僕の腹部に笑顔で顔を擦り付けている、ローラお姉ちゃんがいる。

「何やつてるの」

僕が冷静にそう聞くと、それが不満なのか頬を膨らませながら喋り出す。

「反応が薄いです」

「ローラお姉ちゃんは言葉が可笑しいよ」

僕がそう返すとローラお姉ちゃんは立ち上がり、「可笑しく、そんなはずはありません」と何かビミョーにお姉ちゃんぶりながら言つ。

「 むうひひひもいいよ」

そつ言いながら僕は足に力を入れながら、ゆっくりと立り上がる。

「スタイル、何の様で來たんですか」

「ああ、茜の寝る場所についてだが、「私のベッド」」「一人の声は見事にハモりながら、スタイルの言い終わる前にそつ告げた。

「君達は何を考えてるんだ。茜は『男』だよ」
スタイルがそつ言つた瞬間に、ローラお姉ちゃんは床に手を着けながら倒れた。

「じつしたの? ローラお姉ちゃん」

僕がそう声を掛けたと同時に
「負けた」とローラお姉ちゃんは呟いた。

「えつ?」

驚きのあまり、そんな声が出た。

するとローラお姉ちゃんはまた咳き始める。

「こんな可愛いいらしい茜が男で。しかも、私よりも可愛いのに」

ローラお姉ちゃんのその言葉は強く、そして鋭く僕の心に突き刺さる。

1-1-3・5(前書き)

感想を下せ。

直径2mぐらいの一人用のベッド。そんな中に茜を挟む様に、火織、ローラが横たわっている。

茜の体は脱力され、完全に眠りに付いている。

そんな無防備な茜を見て、火織とローラは楽しんでいた。

((可愛い))

二人はそんな事を考えていると、ゆっくりと腕を伸ばし、そして茜の頬に触れた。

すると茜の頬は二人の指に合わせてへこみ、指には不思議な感覚が伝わる。

(もつと強く、やつてもいいよね)

二人はそんな事を考えながら、ある決勝を決めた。

そして指で頬を挟む様に摘む。

すると二人の指には柔らかい頬の感触が伝わる。

茜の頬は気持ち良く、二人は茜の頬に呑まれる様に、更に強く摘み、茜の頬を楽しむ。

その途端、二人の力が強すぎるのか、大きく、ゆっくりと吐息を出していく。

「うう——」

茜の吐息は一人の耳に当たり、一人を気持ち良く刺激していく。そんな事を一人は1時間ぐらい楽しんでいた。

時刻が0時になろうとする頃、一人は未だに茜で遊んでいた。

するとローラが待っていたかの様に火織に向かつて話し出す。

「神製。お話がありんすけどいいですか？」

正確な日本語ではないが、ローラの声からは冷静に、且つ何かを見据えてる様に深い何かがある。

「分かりました」

火織はローラの感情を察しながら、紳士な言葉で返したが、気持ち的には（日本語が可笑しいです）と関係ない所に向いていた。

「では」

「ええ」

ローラの声に火織はそう頷くと、一人は茜を起こさない様にしながらベッドから下りて、ゆっくりと扉を開き、廊下に出た。

廊下に全ての物を凍らせる程の静寂が走っている。

だが、一人はそんな静寂に気づく事すらなく外に向かつて歩き出した。

二人の間に会話で言う文字はなく、ただ一人が歩く度になる足音だけが響き渡り、静寂の中に存在する。

そんな『無』と言つ言葉が似合う場所を維持するかの様に、何も喋らないまま一人は歩いている。

10分も歩き続いていると玄関に着いた。

玄関とは言つても、教会ではほとんどの人が外履を履いたまま入るため、出入り口が正しいだろう。

それを示すかの様に下駄は一切ない。

そして二人はそのまま外に出た。

するとローラは何ともないだらうが、火織には強烈な寒さが襲う。だが火織はそれを無視しながら、ローラに向かつて喋り出す。

「それで、話つてなんですか？スチュアートさん」「火織は冷静に近い、怖さを帯びた声でそう言った。

「まあ、そんな怖い表情をしないでいいですぞ」

「どうでもいいので、早くお願ひします」

火織は全く聞き耳を立てずにそう言った。

何故、火織がここまで早くしてもらいたい理由は簡単だ。

（早く茜を触りたい）

そう、単純過ぎるが火織は本当に急いでいた。

「まあ、いいであります」

ローラはそう言いながら、ゆっくりと大きな息を吸い、そして

「本題は『茜』の事」と告げた。

その声が火織の見て入った途端、唐突過ぎたのか、火織は頭の上に？を浮かべた。

だが答えは出るはずもなく、火織は喋り出す。

「茜の事とは、どういう意味ですか？」

「簡単でありますよ。神製、茜は私が預かります。勿論、明日の日本、学園都市にもついていきます」

ローラのそんな声が火織にゆっくりと響き渡り

（茜を？いや、でも茜は私の弟）

と火織は動搖しだすが、ある結論に辿り着いた。

それは

「良いですよね？」

「です」

火織は小さく、そして心を読み取る様に呟く。
だが、そんな小さな声はローラに届くはずもなく、
「えつ、何つて言つてるんでありんすか」

ローラはそう聞き返した。

火織はテンパつていて自分を落ち着かせる様に、大きく、ゆっくり
と息を吸い

「嫌です。茜、茜は私の弟で、私の物です！」

そう叫ぶ様に言い切つた。火織の声は大気を震わせる様に、あたり
一体に響き渡る。

「分かりました。では、私は正々堂々と神製、貴方から茜を奪い取
りましょう」

「ええ」

二人はそう誓い合いながら、茜が寝ている部屋に向かつて歩き出す。

約10分後、二人は部屋に着いていた。
扉の鍵は掛けられ、完全な密室になつている。

二人はそんな情報に感謝する様にベッドに横たわり、そして茜の腕
を抱きしめる。

茜の腕は二人の体に密着しながら、圧迫されている。

だが、茜は目覚める事なく、一人を受け入れていた。

「「お休み茜」」

二人の声がそう重なると、一人は茜の頬にキスをする。すると一人の唇には柔らかい頬の感触が、優しく唇を包み込んでいく。

二人はそんな茜の頬を楽しむ様に、味わいながら眠りに着いていく。

1-1-4 (前書き)

中途半端なタイトルだったので一つ田を投稿します。

田の前には白い世界が広がっている。果てはなく、ただただ永遠と言つ物だ。

そして、そんな田の世界とは似合わない者が僕を見る。僕とは必然的に田が合ひ、僕の体には震える様な寒気が走る。

僕はそんな寒気を感じながらも、僕と田が合つた者を見る。

血が付き、真紅と言ひ、滲む様な美しい色を描き出しているワイスヤツを着ている。そんな恐怖と言ひやの真紅だが、多分だが最終は真つ白だつたであろう。

そんなワイスヤツの肩甲骨辺りは布は吹き飛ばされた横に破れ、そして炎の翼がある。

翼は少しでも動く度に、大氣を燃やす様に熱く、そして触れられな様な闇を帶びている。

手には真つ赤な、真紅の血を付けたブレードを持っている。ブレードに付いた血は、ゆっくりと床に向かって流れしていく。血の雲はその足下に付こうとするが、付かない。いや、付かないと言ひ寄りは、落ちていく。

「久しぶり、いや、20時間ぶりぐらいかな?」

そいつはそんな奇妙な光景を見て、動搖すらせずにそんな事を言った。

その声が僕の耳に入ってきた瞬間に、僕は足を回す様に後ろに下げ、

体を構える。

「そり、強張るなクズ君」

僕は体に力を入れながら

「黙れよ僕、いや茜」

そう言つた。僕と目が合つたのは夢の僕だ。

「ふつ、まついつか。それにしてもこの魔術って言つのはいいものだな。自分の想像通りに動くし、それに殺しにはピッタリだ」
そいつの口から出た、そんな戯れ言に睡然とする。が直ぐに分かつ。そいつは決して「冗談を言つてるわけではない。ただ殺しに使えると思つただけなんだと。

「じゃあ、殺し合いの始まりだな！！」

そう言いながら、そいつは持つてているブレードを地面に擦り付ける様にしながら、僕に向かってみると、肩を襲う様にブレードを振り上げた。

僕は足元から身体中の力を脱力、そして感覚を研ぎ澄ませながら、炎を出した。

炎は螺旋を描く様に僕を囲み、そいつのブレードを僕から弾く。ブレードが甲高い音を上げ、そいつは炎の翼を動かしながら、強烈な風をおこしながら、僕から離れていく。

「逃がすかよ」

螺旋を描いた炎をそいつに意識を向けながら、炎を操りながらそいつに向かって放つ。すると炎は大気中にある酸素を吸収し、爆発的な温度と炎になっていく。

「逃げねえよ」

そいつはそう言いながら、炎の翼を大きく僕に向かって動かす。周囲には大量の火の粉が飛び散りながら、ブレードを僕の右腕に向かって振り放つ。

「どうかよ

僕はそう言いながら、右手に氷の刃を作り、そいつのブレードを防いだ。

「ならば……」

その途端、そいつは翼の炎をブレードに纏わせながら、僕に再度降り放つた。

「パクってみるか

僕は刃の表面に炎と雷を纏わせた。

「そんな事しても溶けるだけだ！」

「溶けなえよ

刃に纏つた炎はアブソリュートゼロ。^{アブソリュートゼロ}つまり絶対零度の炎で溶ける事なんてない。そして雷がそんな刃に帶びて、大気中にある流出やゴミに反発していき、破壊力を増していく。

そんな刃を持ちながら僕は体を回す様にしながら、そいつのブレードに向かって防ぐようにしながら、力を入れ、吹き飛ばした。

ブレードには半分ぐらいにまでヒビが入り、あと一撃すらも放てない程になつた。

だが、僕は反動を受けたのか、僕の集中と感覚が途切れたのか、刃は粉々になる様に消滅していく。

「ちっ」

僕の口からは思わず、そんな舌打ちが出た。

まあ、やつぱりね。キレると人格の半分ぐらくなら変わる。よね

「ふつ」

するとそいつは僕を見下すかの様に、そんな不適な笑みを浮かべた。そいつのそんな笑みが、僕を馬鹿にするかの様に苛立たせる。

「気持ち悪い」

僕はその苛ついた気持ちをぶつける様に、足に炎を作り出し、空中で爆発させる様に発火させながら、そいつに向かつて移動する。

するとそいつはまた不適な笑みを浮かべるながら、

「GANTZのミッションで死んで、こんな世界に媚びて、大切な人を作つた、てめえ何かに負けるはずないだろが！！」

そう言いながら、そいつはヒビの入つたブレードを僕に向かつて振り下ろした。

僕はブレードの事など耳に入らず、ただ、そいつの言葉が僕に怒りを作り出した。

そしてブレードは空気を切り裂く様に、大気を震わせるながら唸りを上げながら、僕の肩を切り裂く様に近づいてくる。

そんなブレードに手を翳しながら、ゆっくりと息を吸い

「燃えろ」

そう呟えた。

するとブレードには炎が生まれ、そしてブレードは炎により溶けていく。

「ふつ、たかだかこんな炎で僕を殺れると思ったか」
そいつはそう言いながら、ブレードから手を放して、腕を僕の胸に突き刺さした。

「えつ？」

僕がそんな驚きの声を出している時には、もう胸からは大量の血が流れ、床のない永遠の空間に落ちていく。

身体中にはその血の量に見合った痛みが体を蝕み、そして意識を遠のかしていく。

盲ろうとしていく意識の中に「また、鍛えてこいよクズ君」といつのそんな声が響き渡る。

「くそ-----！」

そんな叫ぶ様な声を出すと、喉には声帯を潰す程に強烈な力が入り、喉に痛みが走りながら、僕の視界は暗くなつていった。

そんな暗い視界の中で目には光が入つていく。
それは目に痛みをやり、僕は目を覚ました。

「ハアハア夢、かハアハア」

僕は肩で息をするかの様に荒れ、腕に力を入れながら、体を起き上がりせ様とするが無理だった。

僕は腕に向かつて、首を回す様に動かしながら見てみた。

そこには片腕ずつに火織お姉ちゃんとローラお姉ちゃんがいた。
二人があつたかいのか腕には熱が伝わっている。

「な、な、なななななんで」
そして一人を見た瞬間に、僕の口からはそんな声が出た。

1-15 (前書き)

ストーリーが大変です。

「な、な、ななななななんで」
そして二人を見た瞬間に、僕の口からはそんな声が出た。

すると二人はゆっくりとベッドの中で、体を伸ばしながら起きてい
く。

「「んんー」」

二人はそんな声を出しながら、ゆっくりと目覚め、次の瞬間、二人
は腕から離れて、僕の胸に抱きついてきた。

「ちょっ！」

二人の腕は体を圧迫する様に力が入つていて、体には一人の暖かい
体温が伝わっているくる。

それと同時に恥ずかしさと、緊張が体を支配してら心臓がバクバク
と大きく揺れて胸の辺りに痛みを走らせる。

と言つたか、僕どんだけヤバイの

僕がそう思つた時には体はもう固まっていた。いや、正確に言えば
強張つているだけだから、少しは動くんだろう。

「あつ？茜おはよ」

ローラお姉ちゃんが完全に目覚めたのか、笑顔で挨拶してくれた。

僕はゆっくりとだが体を動かしながら、「おはようじやないよ」「み」と
言つた。だけど、直ぐに体が固まっちゃつた。

「大丈夫でありますか？茜」

ローラお姉ちゃんは心配してくれてゐるのか、僕から離れて、そんな声を掛けてくれた。

「うにゃ」

その瞬間、ローラお姉ちゃんが火織お姉ちゃんを踏んだのか、そんな可愛い声を出した。

「あつーごめであります」

ローラお姉ちゃんはそう誤りながら火織お姉ちゃんから離れた。

「大丈夫ですよ」

「よかつた」

二人がそんな風に話しているためか、僕は蚊帳の外にいた。

と言つが、もう分からぬよ。

「はあー」

無意識に大きく溜め息を吐いた。すると二人は僕から離れてくれた。二人が離れた瞬間に、体の緊張や恥ずかしさが消えていき、体が動く様になつた。

「今更だけど、二人共おはよ」

「「おはよ」」

二人は僕を溶かす様な笑顔でそう言つてくれた。

そして5分くらい、朝日から動いて疲れた体を休ませていく。

「何か話でもしますか」

火織お姉ちゃんが気を使って、そんな事を言つてくれた。

「分かつた」

「大丈夫だよ」

とローラお姉ちゃんと僕は火織お姉ちゃんの話に乗つた。

「では最初は茜から」

火織お姉ちゃんがいきなり僕に降つて來た。僕は軽く考えながら、ある事を思い出した。

それは

「さつき何で二人共、僕の腕に抱きついていたの？」
と僕はふと思い出した事を聞いてみた。

すると火織お姉ちゃんは間が悪くなつたかの様に黙り込んだ。
いっぽうローラお姉ちゃんは「一緒に寝て、茜で遊びたかったから
でりんす」と堂々に言つた。

その声を聞いた瞬間に、僕は何だか氣恥ずかしくなつた。
でも、ローラお姉ちゃん。こんな事を堂々に言つちゃダメだからね。
僕はそう心の中で思つた。

こんな風に話していると5分と言つのはあつという間に過ぎて言つた。

「では、服でも着替えましょうか

火織お姉ちゃんはそう言ひながら、部屋にあるタンスに手を掛けながらそう言つた。

「火織お姉ちゃん」

気になつた事があつた為、僕は火織お姉ちゃんを呼ぶ。

「何ですか茜？」

「いや、僕の服つてないし、それにあつたとしても、着替える場所つて何処？」

と僕は思った事をそのまま口に出すといふと、僕の中で違和感とやら言うか、嫌な予感が出た。

「服は私のを貸して上げます。あと着替える場所ですが、もちろん此処ですよ」「やつぱりね。

僕は火織お姉ちゃんの発言をまるで、当たり前かの様に受け入れた。と言つたが、言つた所で僕は無理だと覚つていた。

すると火織お姉ちゃんとローラお姉ちゃんが僕の服に手を掛ける。火織お姉ちゃんの手はジーンズのボタンを外していく。ローラお姉ちゃんはゆつくりと僕のTシャツを上げていく。

つて！

「キヤ——————！」

僕は30秒ぐらい、そんな悲鳴の様に叫んでいた。

すると二人は息を荒くしながら、喋り出す。

「ハア 茜可愛いでりんすよハアハア」

「ハアハア 茜は男なのに、こんな括れがあるなんて、ハアハア反則ですよ」

火織お姉ちゃんが僕の腰に腕を回して、まるで腰周りを測るかの様にそんな事を言いながら、服を脱がしていく。

「だから、辞めつ！」

逆らう為に手に力を入れて、一人を離そうとするが、一人は全く動かない。

「だから」「ダメだよ」「

一人の声で僕は喋る事すら出来なかつた。

そうして僕は一人によつて着替えさせられた。

白いキャミソールに、腰から膝の半分ぐらいの短い間に、白い生地に黒いラインを入れたミニスカートを履いている。

「可愛いよ。茜」

「可愛いすぎであります」

そんな僕を見て二人は、僕に向かつてそんな風な言葉を掛けくれる。

「恥ずかしいよ」

僕は体を熱くしながら、気持ちを込めながらそう言つた。

本当に恥ずかしい。しかも、何で、何で一人に着替えさせられなきや、いけないの。

僕がそう思つていると、一人が服を脱ぎ始めた。

「ちょっと！脱ぐなら言つてよ」

僕は一瞬、驚きの声を上げると、直ぐにそう言いながら扉の取っ手に手を掛けて、扉を開け様とする。それと同時に背中をなぞられる様な感覚が走る。

「ひやー！」

背中をなぞられると、背中に不思議な何かに刺激されて、そんな声を出した。

「可愛い過ぎです」

火織お姉ちゃんは何かに敗北したかの様に、そんな事を言った。

「見てほしりんす」

ローラお姉ちゃんが間違った日本語でそんな事を言つと、僕に見せつけるかの様に服を脱ぎ出す。

「負けられません」

火織お姉ちゃんはローラお姉ちゃんに対抗するかの様に、自分の服に手を掛けて脱ぎ出す。

「張り合わなくていいから」

そうして僕は田の行き場に困りながら、その場を耐えしのいだ。

と言つかもう、大変だよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8516z/>

とあるGANTZからの転送者

2012年1月5日20時52分発行